

第3章 史跡馬越長火塚古墳群の本質的価値

第1節 本質的価値の明示

1 古墳の調査成果

ここでは馬越長火塚古墳、大塚南古墳、口明塚南古墳の3基からなる史跡馬越長火塚古墳群の本質的価値を明示するにあたり、必要な調査成果について、その概要を示す。

(1) 馬越長火塚古墳

古墳が立地する地形 古墳の南と北側の開析谷に挟まれた舌状の台地（扇状地）上に位置する。南側谷底からの高さは、後円部が8m、前方部が5.5mである。

墳丘 馬越長火塚古墳は全長70mの前方後円墳で、墳丘は地山削り出しを主体とする下段と、盛土からなる上段で構成される。後円部中央にある円丘部を除き、墳丘はほぼ全面が葺石で覆われている。後円部の葺石は、石垣状に石積みをも急傾斜で立ち上げた後、緩やかに傾斜させる行為を3回繰り返しており、3段の段状をなしている。前方部も段状に成形されており、厳密な段数は不明であるが、後円部から連なって3段になる可能性が高い。墳丘の規模は上段で後円部の径31m、同高さ5.5m、前方部の長さ31.5m、くびれ部の幅15m、くびれ部付近の高さ3.5mを測る。6世紀後半以降では、東海地方最大の規模である。

墳丘の形状はきわめて特徴的で、前方後円形の地山削り出しによる下段の上に、ドーム状の高まりをもつ後円部と低く細長い前方部からなる上段がある。墳丘南側の谷は、前方後円形に加工されて下段の一部を構成しているが、上段に比べてくびれが弱い形状である。上段の後円部はドーム状の高まりのまわりが緩やかな3段の階段状になっており、前方部も3段に築造されていたと考えられる。前方部の西半部は柿畑に改変されているが、その中に上段前方部の一部がよく残っている。

このように、低平な前方部とは対照的に後円部の上段は急傾斜で高いことを特徴とする古墳は、本墳以外に奈良県橿原市見瀬丸山古墳、岡山県岡山市こうもり塚古墳、熊本県氷川町大野窟古墳、福岡県福岡市元岡石ヶ原古墳、長崎県壱岐市対馬塚古墳、長崎県壱岐市双六古墳の6基が西日本を中心に存在する。

埋葬施設 後円部の南側に横穴式石室が開口している。横穴式石室は全長17.5m以上を測り、前庭と羨道、玄室とて構成され、県内最大の規模を持つ。前庭長は5.75m以上、羨道と玄室の長さ11.75m、石室最大幅2.35m、最大高2.95mをそれぞれ測る。羨道と玄室は立柱石によって区別され、さらに玄室も立柱石で前後2室に分けられる複室構造である。また、玄室は平面形が胴張りを呈し、天井石の縦断面形は連続する弧状を呈すること、奥壁には1枚石が使用されるなど、典型的な三河型横穴式石室の特徴を持つ。石材には周辺の産地で産出される石灰岩が主として使用される。

周辺施設等 墳丘の東側と西側は、極めて規模が小さく、浅い区画溝を設けて墳丘と外部とを区別している。後円部東側の区画溝部分には、一部に陸橋状の通路の可能性が考えられる。他方で、前方部西側の周囲より高い柿畑が、古墳に関わる施設の痕跡かどうかは、解明できなかった。

出土遺物 横穴式石室内からは、金銅装馬具や豊富な玉類、多量の墓前祭祀土器群などが出土している。

金銅装馬具は棘葉形杏葉や雲珠・辻金具、鞍金具、半球形飾金具でおもに構成されている。中でも棘葉形杏葉は新羅系馬具を祖形にし、列島で生産された初期の段階のものとして重要で、当時の各地方の最上位層の人物が保有するものと評価されている。写真は巻末資料2を参照のこと。

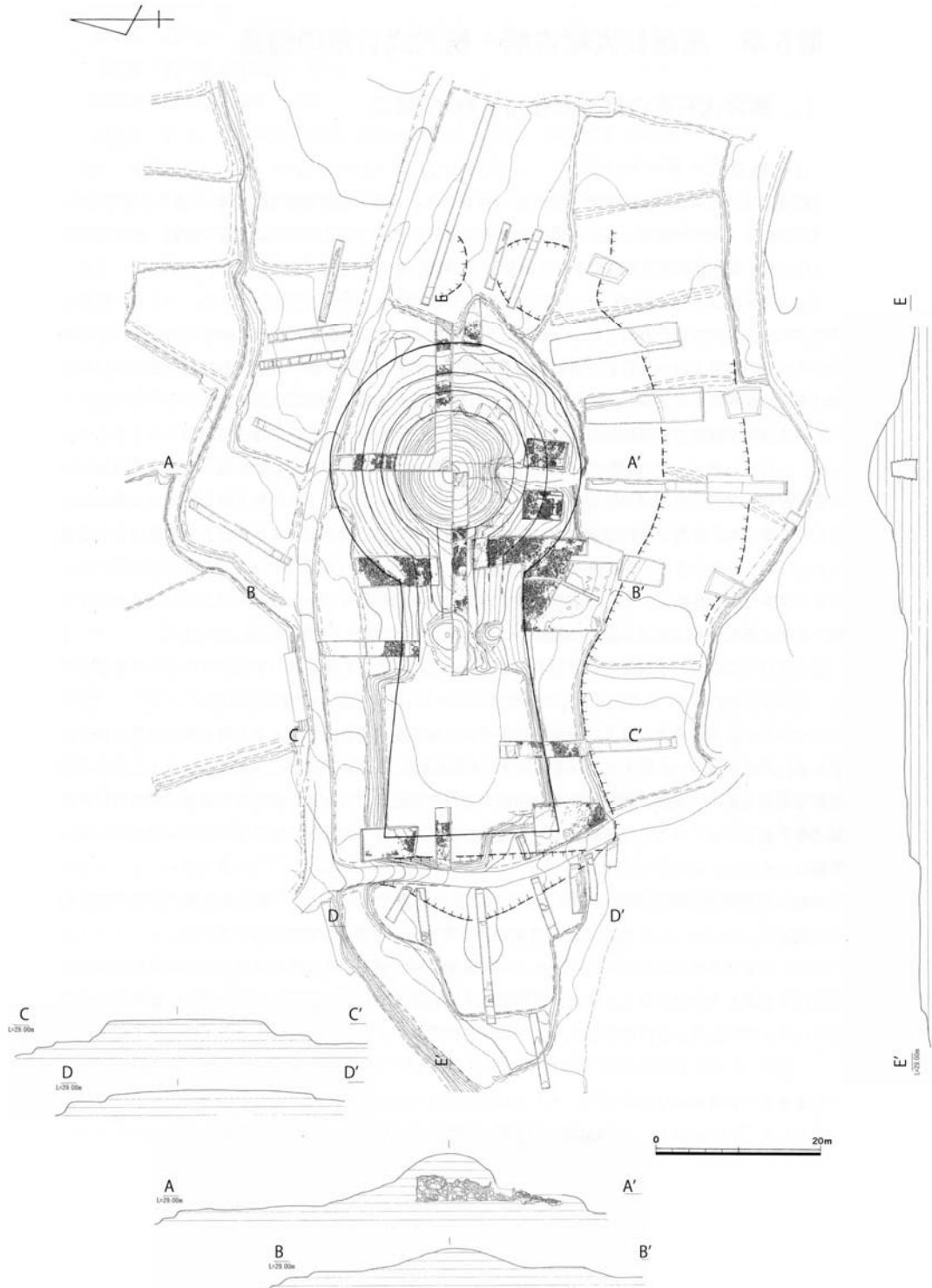
また、玉類にはガラス製トンボ玉や大型の琥珀製梨玉、金銅製空玉が含まれる。トンボ玉には二色のガラスを重ねて巻きつけた「二色重ねガラス玉」のほかに、「線状貼付けガラス玉」や「線状貼付け斑点文ガラス玉」、環状ガラスの連結融合で作られた「斑点文ガラス玉」など類例の少ないものが含まれる。

さらに、石室前庭では築造後に行われた盛大な墓前祭祀に伴う、多量の須恵器が出土している。石室内から出土した大型平瓶とほぼ同時期のものであることから、追葬段階での祭祀と考えられる。器種には坏身や坏蓋のほか、蓋を伴う盃が多く出土していることが特徴的である。横穴式石室の外部で墓前祭祀を行った古墳の例が多数調査されている東三河の中でも、本例の須恵器の出土量は突出して多く、器種が多様である。これらの編年的位置は、口明塚南古墳から出土した須恵器よりも明らかに後出するものであり、口明塚南古墳築造以降の首長者の

動向を考える上で重要な位置を占める。

以上のほか小型仿製鏡片や、象嵌装大刀・鉄鏃・弓飾り金具などの武器、鉄製鎌、刀子などの農工具、耳環などの装身具など、多様な副葬品が出土している。これらは東海地方における古墳時代後期の首長墓を特徴づける出土品として、平成24年9月6日付けで重要文化財に指定された。金銅装馬具らが示す年代は、馬越長火塚古墳の築造及び初葬時期を表すと考えられており、それは6世紀末葉頃である。

なお、古墳から灰釉陶器碗（10世紀）、山茶碗（13世紀）、土師器鍋（16世紀後葉）、近世の瓦が確認されているが、古墳時代の終焉以降の土地利用の状況は不明である。



出典：『馬越長火塚古墳群』2012 豊橋市教育委員会

図19 馬越長火塚古墳 墳丘復元図

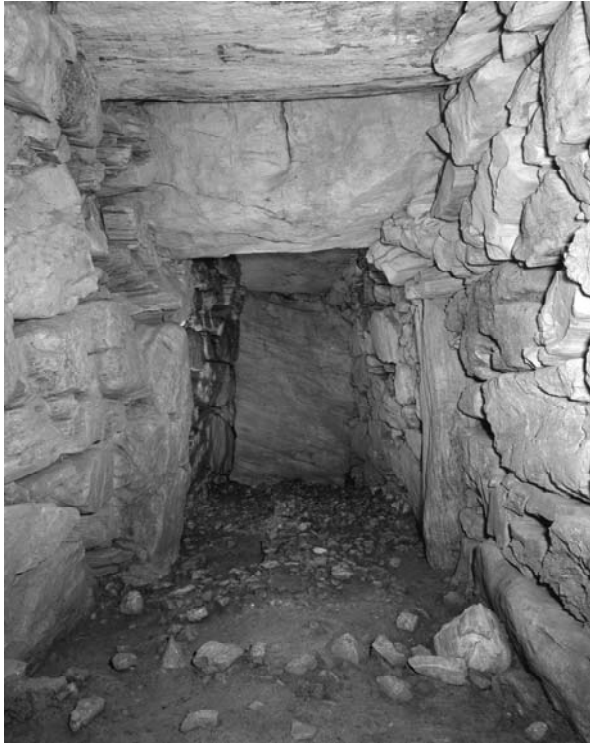


図20 馬越長火塚古墳 石室奥壁

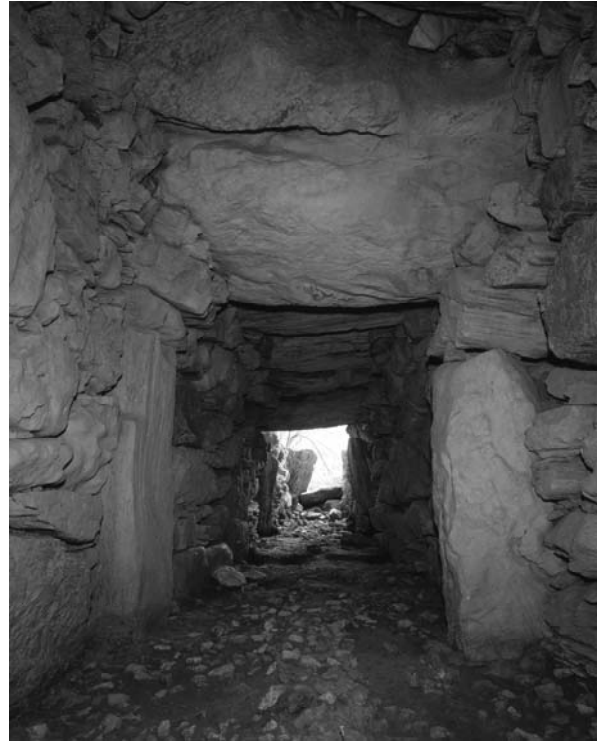
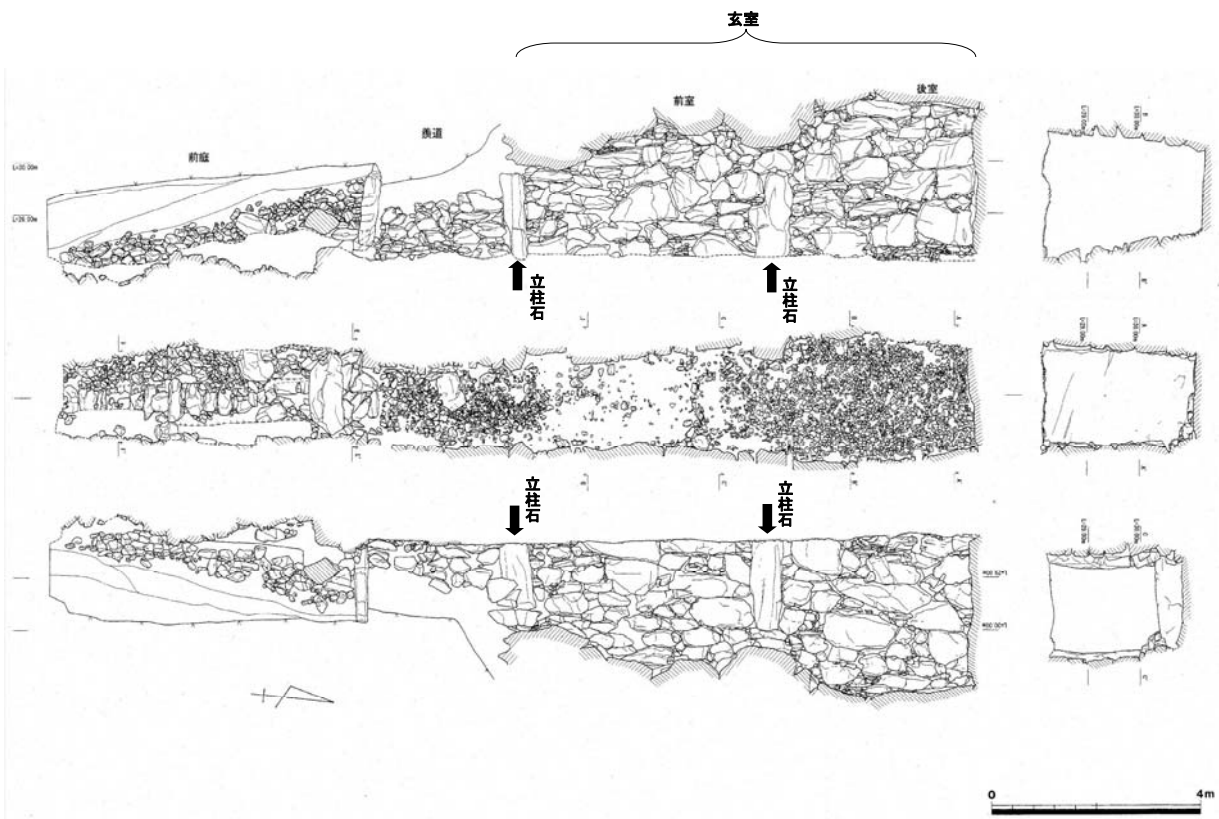
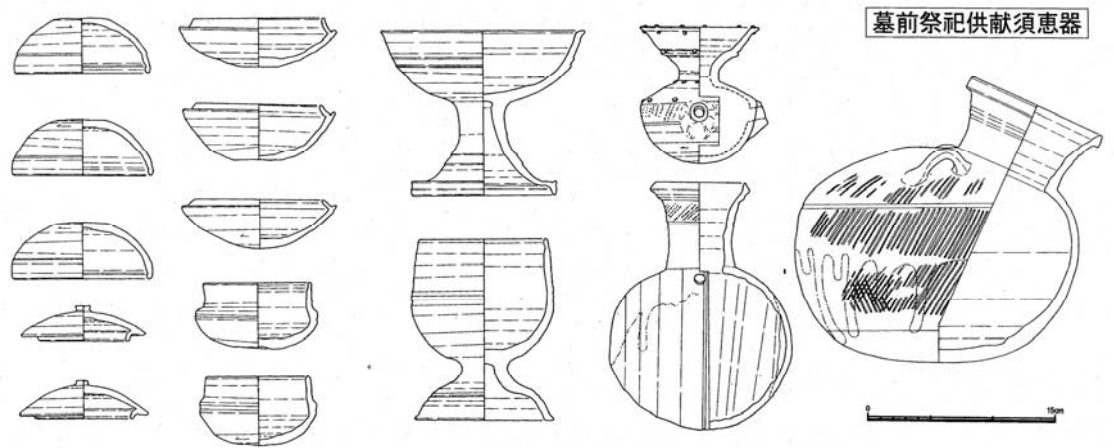
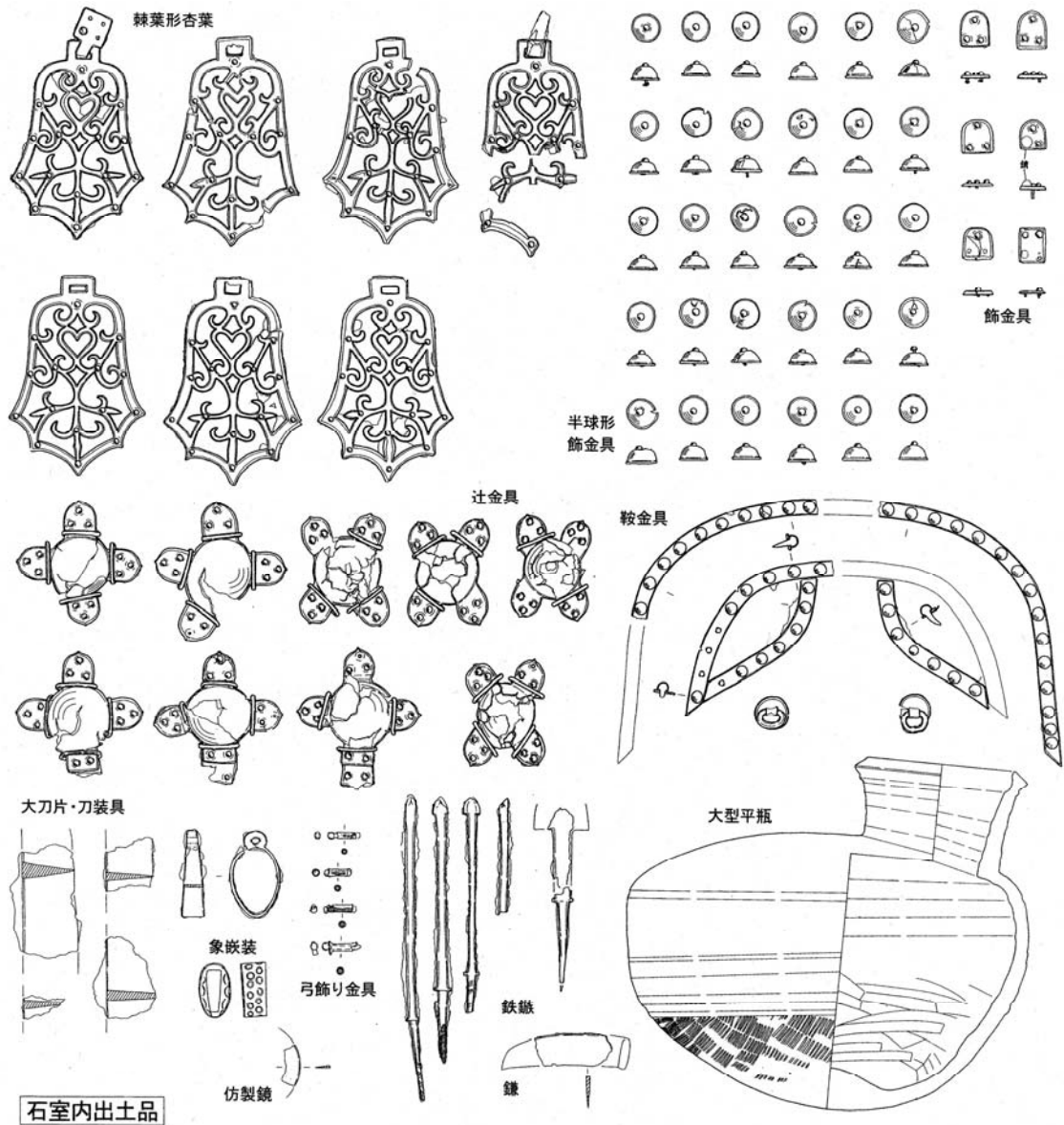


図21 馬越長火塚古墳 石室内から羨道入口



出典：『馬越長火塚古墳群』2012 豊橋市教育委員会

図22 馬越長火塚古墳 横穴式石室展開図



出典：『馬越長火塚古墳群』2012 豊橋市教育委員会
 图 23 馬越長火塚古墳 出土品実測図

(2) 大塚南古墳

古墳が立地する地形 馬越長火塚古墳が所在する段丘から見て、開析谷を挟んだ南西側に位置する。本古墳も南と北が東西方向に走る開析谷によって挟まれた舌状の扇状地上にある。墳丘上が削られている。

墳丘 直径19mの円墳である。墳丘は頂部が柿畑造成による削平で平坦になっている一方、斜面は葺石が比較的良好に遺存する。葺石は上下2段に遺存している。墳丘は2段以上の段構造をなし、本来は3段であった可能性が高い。また、葺石は平坦部と急傾斜が連続し、石材を水平方向に置き並べ、あるいは石垣状に積み上げており、施工技術は馬越長火塚古墳に類似している。

埋葬施設 墳丘の中央にはほぼ南方向に開口する横穴式石室が存在する。石材には石灰岩が主として使用され、床面には敷石が敷かれている。このような特徴は馬越長火塚古墳をはじめ当地域の終末期の横穴式石室に多く見られる特徴である。墳丘の中央に奥壁が位置すると想定した場合、石室の全長は8～9mほどになると推定される。

周辺施設等 墳丘の南から西にかけて、墳裾の周りに極めて浅い溝状の遺構が存在しており、墳丘の内外を分ける区画溝であった可能性がある。

出土遺物 鉄地金銅装花形鏡板付轡と雲珠・辻金具などの馬具と須恵器が出土している。出土品からみた本墳の帰属時期は7世紀初頭と考えられ、本墳は馬越長火塚古墳に後続する時期の古墳であると考えられる。

(3) 口明塚南古墳

古墳が立地する地形 馬越長火塚古墳が所在する段丘とは、開析谷を挟んだ北西側に位置する。北側の丘陵の裾からなだらかに続く段丘の上にある。南と東側が段丘崖の傾斜となる落ち込みに近い平坦面上に位置する。

墳丘 直径23mの円墳である。墳丘上は中央が柿畑造成による削平で平坦になっている。周縁には列石が遺存する。列石は墳丘の前面にあたる南側では、石室開口部付近に大きめの石材を使用するなど荘厳化が図られている。他方、そのほかでは小型の石材を石垣状に垂直に積み上げたところと緩傾斜に置いたところが見られ、石材は水平方向に並べ置くことを基本とする。このようなあり方は大塚南古墳に類似している。

埋葬施設 墳丘の中央にはほぼ南方向に開口する横穴式石室が存在し、前庭部は南に向けてハ字形に広がる。石室の規模は原位置を留める側壁の幅が2.1mあるため、比較的大型の部類といえる。墳丘の中央に奥壁が位置すると想定した場合、石室の全長は9～10mほどになると推定される。石灰岩を主として使用するのは馬越長火塚古墳、大塚南古墳と同様の特徴である。

周辺施設等 明確な区画施設は確認できなかった。墳丘の範囲を区画する大規模で明確な周辺施設を設けないのが、馬越長火塚古墳群の特徴である。

出土遺物 金銅製毛彫馬具や締具、金銅製空玉、須恵器などが出土している。毛彫り馬具は東海地方では出土例が少ない。毛彫馬具が初葬時の副葬品と考えられることや、須恵器の年代から、本墳の帰属時期は7世紀前葉であり、大塚南古墳に後続する時期の古墳であると考えられる。

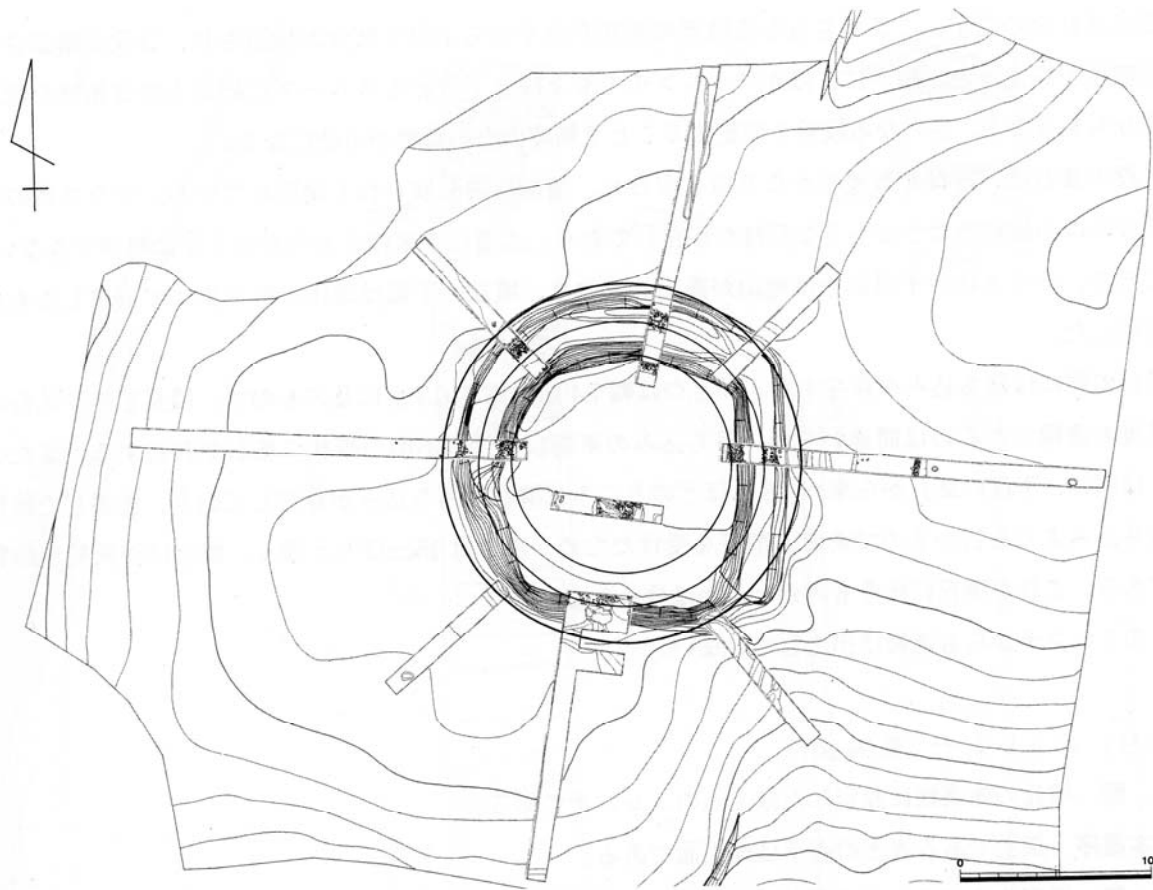
その他、石室の前庭から中世前期の山茶碗や鍋などが出土している。



図24 大塚南古墳

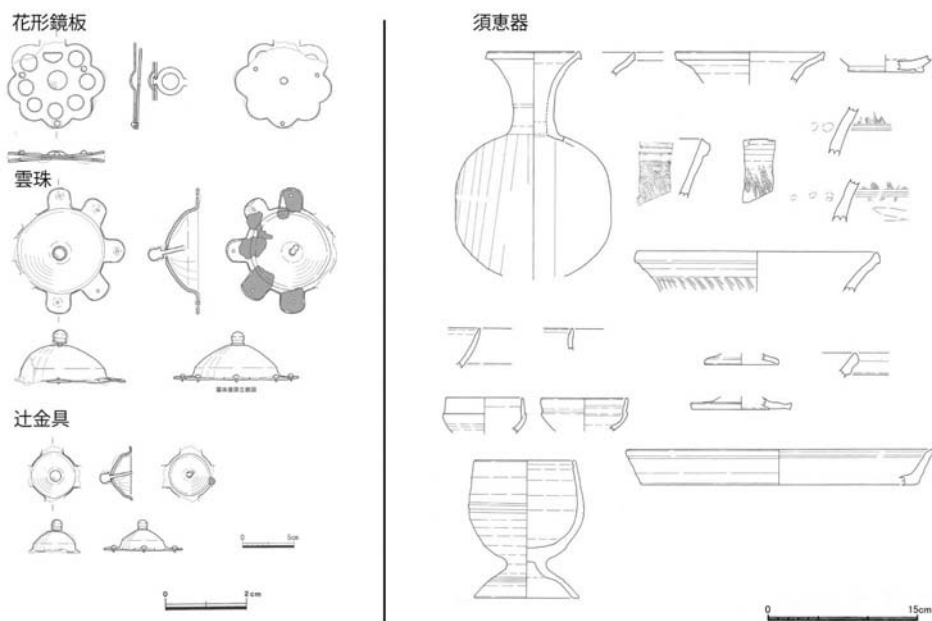


図25 口明塚南古墳出土品



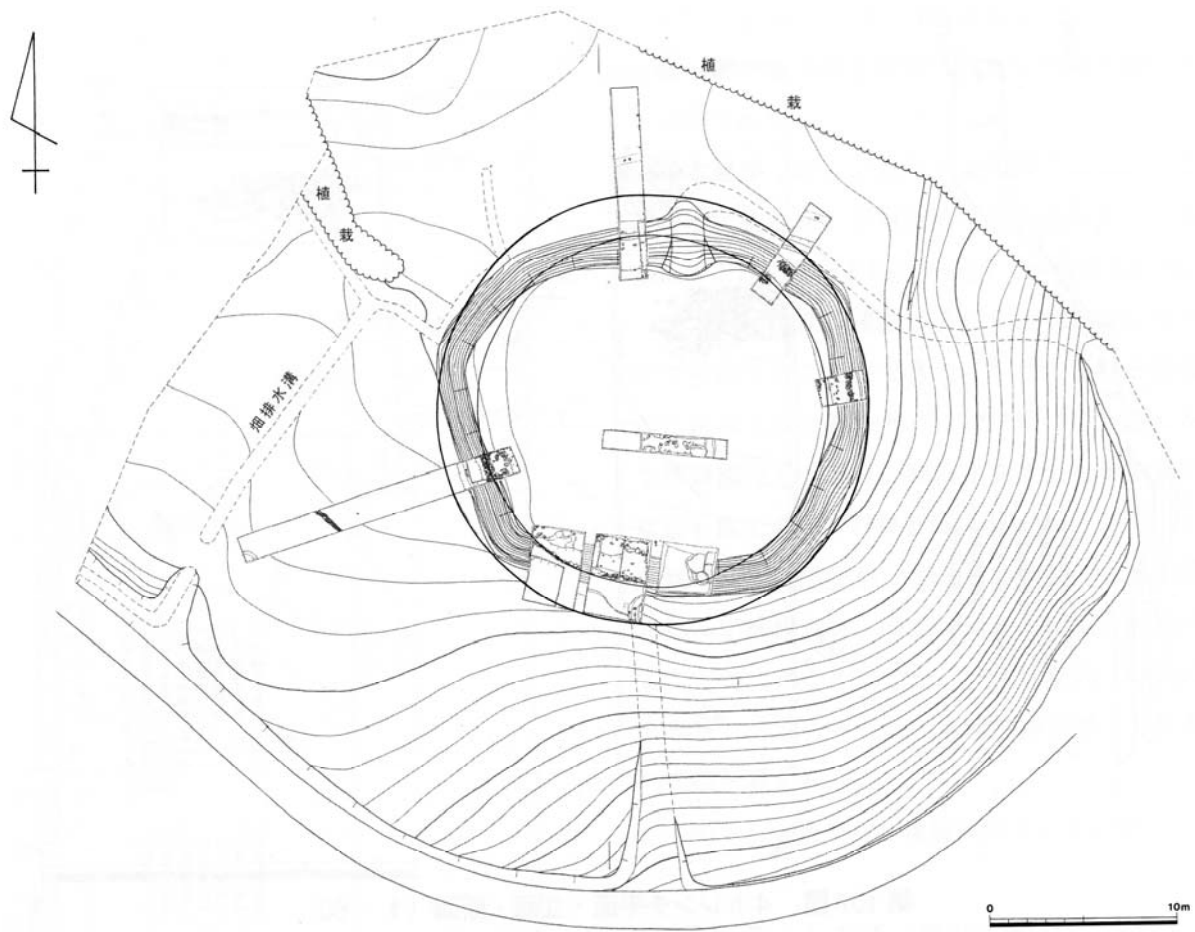
出典：『馬越長火塚古墳群』2012 豊橋市教育委員会

图 26 大塚南古墳 墳丘復元図



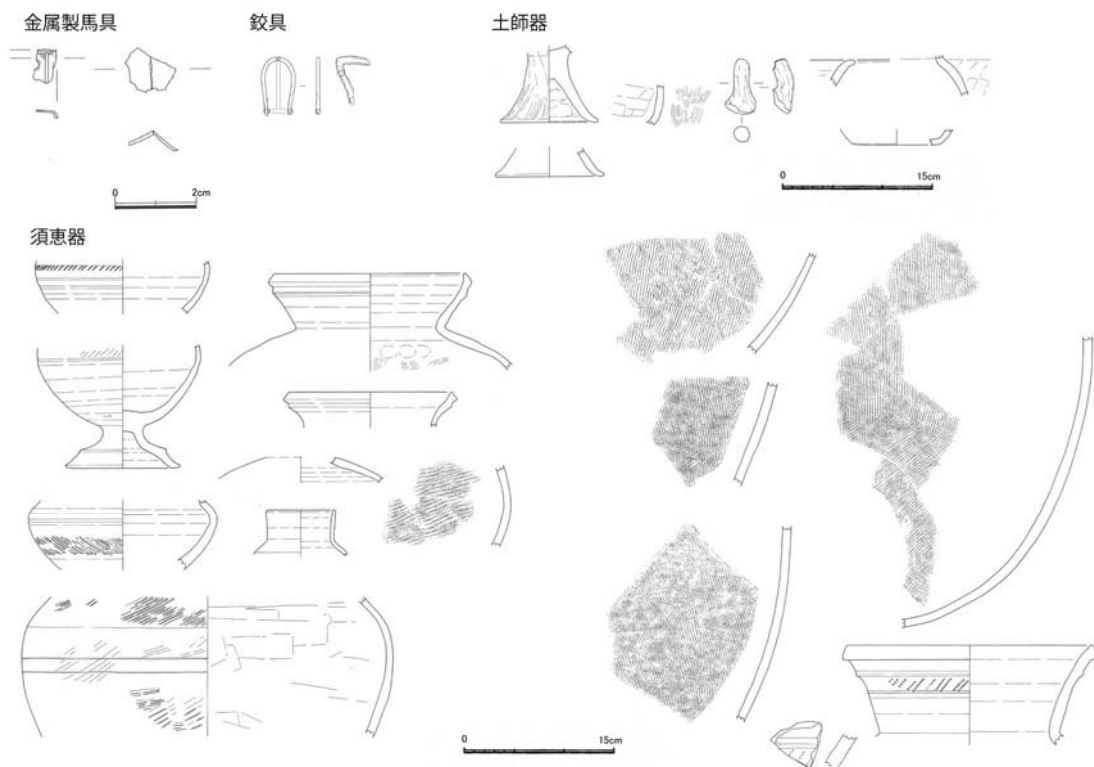
出典：『馬越長火塚古墳群』2012 豊橋市教育委員会

图 27 大塚南古墳 出土品実測図



出典：『馬越長火塚古墳群』2012 豊橋市教育委員会

図 28 口明塚南古墳 墳丘復元図



出典：『馬越長火塚古墳群』2012 豊橋市教育委員会

図 29 口明塚南古墳 出土品実測図

2 史跡の特徴とその本質的価値

(1) 遺構の特徴と価値

馬越長火塚古墳は、前方部が低平であることとは対照的に上段の中央が著しく高いドーム状の円丘部を有する後円部を特徴とする6世紀後半から同末葉の古墳で奈良県橿原市見瀬丸山古墳をはじめ、全国で計6基の類例が知られる。このような特徴を有する一連の前方後円墳は、「見瀬丸山型前方後円墳」と称され、6世紀後半から同末葉までの限定された期間に築造された。これらの外観は酷似しており、①低い下段と急傾斜で高い円丘部からなる上段の後円部を持つこと、②これに反して前方部は上段、下段ともに低いこと、③くびれ部の外郭線はさほどくびれず、全体に細長い盾形を呈するが、上段は強くくびれて細くなること、④後円部に比して前方部が長く、特に上段が顕著である、以上の4点が注意される。また、各古墳出土の副葬品の特徴には、朝鮮半島からの渡来品もしくはその系譜を強くもつ国産品である点が挙げられる。一方、相違点として、内部主体はいずれも横穴式石室であるが、各々の地方の特徴ある形態を採用しており、統一した形態を持っていないことが挙げられる。

馬越長火塚古墳の横穴式石室は、馬越長火塚古墳で全長17.5m以上、最大幅2.35mを測る。玄室は平面形が胴張りを呈し、天井石の縦断面形は連続する弧状を呈すること、奥壁には1枚石が使用されるなど、典型的な三河型横穴式石室の特徴を持ち、他の「見瀬丸山型」の例に洩れない。

このような特徴をもつ「見瀬丸山型前方後円墳」は、近年真の欽明陵との学説が有力であるが、少なくとも、そうした古墳の影響を強く受けつつも、内部主体の独自性から考えれば、その被葬者像は、欽明朝に王権内で活躍し、かつ地域社会の中で大きな力を有した在地豪族の首長像が浮かび上がってくる。さらに副葬品における渡来系の特徴からは、外交関係にも通じた人物であったと推量されるのである。当該地域において、そのような人物といえ、豊川流域にあったと推定される徳国(図31)の国造に任命されたものであったとするのが穏当であろう。

また、墳丘規模は小さいながら、大塚南古墳は石室の推定全長8~9m、口明塚南古墳は9~10mの比較的大きな規模の横穴式石室を持つと推定されることが注目される。特に口明塚南古墳の石室幅が2.1mと大ぶりである点は注意される。さらに、石材に石灰岩を基本として使用していることは、本古墳群に共通する特徴で、古墳群が同一系譜において築造されたことの証拠ともなるであろう。

これは葺石において、石材を石垣状に垂直に積み上げたところと緩傾斜に置いたところがあり、石材は水平方向に並べ置くことを基本としているあり方からも示すことができ、古墳群としての共通の特徴として際立たせている。

以上から、馬越長火塚古墳は「見瀬丸山型前方後円墳」と称される特徴を持つ6世紀後半から同末葉の古墳として位置づけることができる。さらに、横穴式石室の特徴や葺石の葺き方などから、馬越長火塚古墳の築造技術を踏襲して、大塚南古墳と口明塚南古墳が築造されていることから、本古墳群は3世代続いた首長墓の系譜により形成されたものと評価できるのである。



出典・参考文献：猪熊兼勝編1992『見瀬丸山古墳と天皇陵』（季刊考古学別冊2）雄山閣、福尾正彦・徳田誠志1994「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」『書陵部紀要』45、宮内庁書陵部

図30 見瀬丸山古墳墳丘図

(2) 遺物の特徴と価値

馬越長火塚古墳群の各古墳から多くの金属製品が出土した。とりわけ馬越長火塚古墳は、地方の最上位層で多く認められるといわれる棘葉形杏葉や半球形飾金具が出土している。棘葉形杏葉は新羅系馬具の系譜を引き、製作数の少なさから奢侈品ともみなされ、その形から、地方豪族の権威を表す視覚的な意図を持つと考えられる。半球形飾金具は、地域首長の墓から出土することから、地域首長者が保有していた馬具に使われた飾金具であったと考えられる。こうした馬具の特徴からは、地域の有力首長者としてのみならず、ヤマト政権とも強い結びつきをもって渡来系の系譜を引いた文物を入手することのできる人物像とすることができる。

他方、大塚南古墳や口明塚南古墳出土の馬具からみると、馬越長火塚古墳出土例に比べ劣るものの、金銅装花形鏡板や金銅製毛彫馬具などを継続して保有し得た点は、ヤマト政権との関わりが継続していたことを示す。

このように、本古墳群出土の遺物は継続的にヤマト政権との関わりを有していたことを示唆する点で重要なものである。

(3) 古代史上の特徴と価値

馬越長火塚古墳群が築造された6世紀末葉から7世紀前葉は、日本列島全体から考えると、長らく続いた伝統的な古墳時代の政治・社会システムから脱却を図り、新たに移入される「律令」という法体系に立脚した政治システムへの更新を図る、まさに時代の変革期ともいえるべき7世紀の直前の時期にあたる。古墳時代にヤマト政権が地方を治めるにあたって「国造制」と呼ばれるシステムを導入していたことはよく知られているが、古墳時代中期前葉の東田古墳以来、それまで首長墓のみられなかった豊橋市域、すなわち豊川中流域左岸に、後期に至って突如として現れる首長墓系譜の古墳は、この「国造制」に組み込まれた在地首長の墓であった可能性が高く、『国造本紀』の記述から考えても、この馬越長火塚古墳の被葬者が「穂国造」であったと考えるのが自然であろう。

本古墳群は6世紀末葉から7世紀前葉にかけて3世代続いた首長墓の系譜である。累代の系譜が明らかになった事例は三河にはなく、地域の政治状況やヤマト政権と地方との関係を考える上で重要な古墳群であるといえる。このように、馬越長火塚古墳群は、時代の変革期を象徴するような史跡であり、地域社会の歴史の転換期を理解するうえで欠かせない歴史遺産であると評価できる。

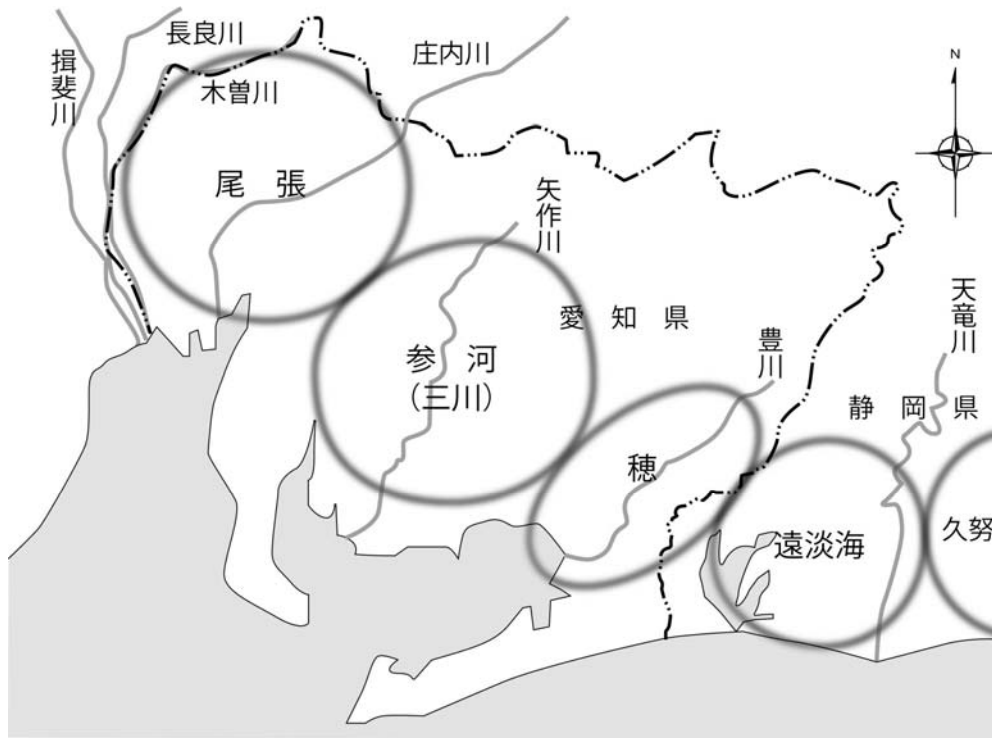


図 31 国造本紀における穂国推定位置

第2節 構成要素の特定

史跡馬越長火塚古墳群の本質的価値を要約すれば次の4点に集約することができる。

- ・上段、下段それぞれが「見瀬丸山型前方後円墳」の特徴を明確に示す**馬越長火塚古墳の墳形**
- ・古墳時代後期後葉では東海地方最大規模であり、東三河地方の特徴ある形態を示す**馬越長火塚古墳の横穴式石室**
- ・被葬者の地位の高さとヤマト政権との関わりを表す**馬越長火塚古墳の出土遺物**
- ・3世代続いた穂の国造と推定される首長墓の系譜を示す**3古墳の群としての存在**

ここから導かれる「本質的価値を構成する諸要素」としては、馬越長火塚古墳の墳丘、横穴式石室、多くの貴重な出土遺物に加え、規模は小さいながらその石室の特徴と出土遺物の様相から後続する首長墓と考えられる、大塚南古墳、口明塚南古墳のそれぞれの墳丘、石室、出土遺物が該当しよう。特に、馬越長火塚古墳の墳丘の範囲は、見瀬丸山型前方後円墳に特徴的な地山削り出しからなる墳丘下段を含む範囲と捉える。また、この墳丘下段に続く、人為的に整えられた南側の谷地形は、一体的に古墳の周辺施設に含める必要がある。さらに、大塚南古墳と口明塚南古墳の遺構や出土遺物は、馬越長火塚古墳のそれらと比べると評価は劣るものの、石室や葺石における石材の使い方や副葬品に共通性がみられ、各古墳が互いに近接して立地すること自体が、3古墳の群としての存在を示していると評価できる。また古墳が立地する地形もこれらに含めるべき要素と考えられる。

一方、古墳上やその周囲には、「本質的価値を構成する諸要素以外の諸要素」として、今日までの古墳の履歴を示す要素や、史跡の管理施設、取扱いを検討すべきものが存在している。石室脇に設置された古墳を詠んだ句碑、史跡説明板のほか、墳丘上の樹木などがこれらに相当する。その他、史跡周辺に存在する他の古墳やその遺物、前近代の交通路などの古墳時代以降の歴史文化資源、史跡見学者用の誘導看板や駐車場などは、史跡の整備と活用に関わるものとして「指定地の周辺環境を構成する要素」にあたる。以上の諸要素を、次表のとおり分類した。

表 11 構成要素の分類

分類	内容		構成要素			
			馬越長火塚古墳	大塚南古墳	口明塚南古墳	
史跡を構成する要素	本質的価値を構成する諸要素	遺構	1 墳丘	・前方後円墳(上段、下段) ・葺石	・円墳 ・葺石	・円墳 ・石列
			2 埋葬施設	・横穴式石室	・横穴式石室	・横穴式石室
			3 周辺施設	・墳丘南側の谷 ・前方部西側の高まり ・浅い区画溝	・墳裾の溝状遺構	—
		出土遺物	・鉄地金銅装馬具・玉類 ・須恵器・武器・鏡など (国重要文化財)	・金銅装馬具 ・須恵器	・金銅装馬具・金銅製空玉 ・金銅製鉸具 ・須恵器・土師器	
	古墳が立地する地形	・開析谷に挟まれた舌状の扇状地	・開析谷に挟まれた舌状の扇状地	・丘陵裾の段丘崖に近い平坦面		
	上記以外の要素	今日に至る古墳の履歴を示す要素	古墳に関連する歴史文化資源	・句碑	—	—
		管理施設	標識、境界杭、囲柵、標柱、説明板	・総合説明板 ・遺構解説板	—	—
取扱いを検討すべきもの	建築物、工作物(看板、道路、水路含む)、地下埋設物、樹木	・市道石巻本町5号線 ・水路・豊川用水(暗渠) ・上水道管(本管) ・墳丘上の樹木	・古墳北側の農業用倉庫 ・柿畑の排水溝 ・墳丘周囲の柿畑	・墳丘上、周囲の柿畑 ・管理放棄地の樹木等		
指定地の周辺環境を構成する要素	古墳に関わる墓域・居住域・生産域	古墳周辺の弥生時代から古墳時代の遺構・遺物	指定地周辺の古墳の分布 ・茶臼山1号墳(前期)、茶臼山古墳群 ・勝山1号墳(前期)、勝山古墳群 ・権現山1号墳(前期、県指定)・権現山2号墳(前期、県指定) ・七ツ塚古墳群(後期～終末期)・宮西古墳(後期～終末期、市指定) ・馬越北山古墳群(後期～終末期)			
	その他の歴史文化遺産	歴史文化資源(伝承・民俗)	・九十九塚・素盞鳴神社・宝蓮寺・馬越城址 ・春興院・いぼとり地蔵・和田城址 ・古代交通路としての姫街道(脇往還)と沿道の文化財			
	便益施設	公園、駐車場、看板(サイン)、道路、水路	・県道からの誘導看板(2箇所)・馬越集会所 ・集会所脇の駐車場・馬越遊園・民間の果樹直売施設(果実村)			
	自然・景観土地利用	開析谷、扇状地、農地、樹林地、境内地、集落	・田園景観・盆地・採石場の特徴的な景観			